

埤雅の研究・其十 積木篇 (2)

加納 喜光／鈴木 千春

【栗】

栗、味は鹹、北方の果なり。棗蝟有りて自ら裹む。故に先賢云ふ、阜なる者は柞栗の属、膏なる者は楊柳の属、覈なる者は李梅の属なりと。『国語』に曰く、「婦摯は棗栗に過ぎず。以て虔を告ぐるなり」⁽¹⁾と。先儒以為へらく、棗は早敬に取り、栗は恂栗に取る。『東觀書』に曰く、「栗駭蓬転」⁽²⁾と。蓋し、今栗房秋に孰し罅発す。その実、驚躍すること爆けるが如し。根幹を去ること甚だ遠し。所謂栗駭とは其れ此れを以てするか。『詩』に曰く、「山に樞有り、隰に楡有り」⁽³⁾、「山に桤有り、隰に桤有り」⁽⁴⁾、「山に漆有り、隰に栗有り」⁽⁵⁾と。言ふところは、国君財有れども用ふる能はざること、猶ほ之れ山隰自ら其の材を用ふること能はざることがとし。故に人、卒く之を取りて以て用と為すなり。然らば則ち秦詩に曰く、「阪に漆有り、隰に栗有り」⁽⁶⁾と。何を以て美と為すか。是の詩を曰ふなり。是の謂ひに非ざるなり。秦仲既に君子を見る。礼楽の好有り。故に此れを道きて以て戒めと為す。言ふところは、宜しく並坐して簧を鼓舞すべし。今時に及んで以て自ら虞樂する能はざれば、則ち壯者は其れ養ひ、老者は其れ亡びん。此れ其の美と為す所以なり。養の言はるは跌なり。『易』に曰く、「日昃くの離なり。缶を鼓して歌はざれ

ば、則ち大養の嗟あらん、凶」⁽⁷⁾と。此れと義を同じくす。伝に曰く、「其の言一なり」⁽⁸⁾と。言なる者異なれば、則ち人心変ず。母より之を言ふは則ち賢母と為す。妻より之を言へば則ち未だ妬妻と為すを免れず。蓋し言の異、此くの如き有り。『相法』に曰く、「白きこと肪を截るが如し。黄なること栗を蒸するが如し」⁽⁹⁾と。今黄玉、之を栗玉と謂ふ。義、蓋し此れに取る。内則に曰く、「棗、之を新たにすと曰ふ。栗、之を撰すと曰ふ」⁽¹⁰⁾と。按ずるに『儀礼』に曰く、「棗蒸栗扱」⁽¹¹⁾と。蓋し之を蒸するを之を新と謂ひ、之を撰するを之を扱と謂ふ。

【注釈】

- (1) 『国語』卷四・魯語上。
- (2) 『東觀漢記』卷二二。
- (3) 『詩経』唐風・山有樞、第一スタンザ。
- (4) 『詩経』唐風・山有樞、第二スタンザ。
- (5) 『詩経』唐風・山有樞、第三スタンザ。
- (6) 『詩経』秦風・車鄰、第二スタンザ。
- (7) 『易経』離。
- (8) 未詳。
- (9) 『相法』漢の許負の撰という。敦煌本に残卷がある(『神秘文化典籍大観』)。

(10) 『礼記』内則。

(11) 『儀礼』土虞礼と特性饋食礼。

【考察】

栗は、和名チュウゴクグリ(学名 *Castanea mollissima*) に同定される。チュウゴクグリは中国原産で華北から雲南地方に分布する(『世界有用植物事典』)。果実はいがに包まれていて、熟すとそのいがが裂開する。「今栗房秋に孰し罅発す」とはそのことだろう。

棗の音サウは蚤・早に通じて早起きの意をとり、栗は慄に通じて、戦慄驚愕の意を表し、敬虔の徳をあらわすという(『新釈漢文大系・国語』)。そのため『国語』にあるように、女性の贈り物として、棗や栗が重宝されていた。また「早立子」という言葉がある。

これは早く子供を作るという意味があり、音通する「棗栗」を寢床にまいて早く子供を産むことを願う風習がある。女性の贈り物に用いられるのは、このように出産に関わりがある植物だからかもしれない。

「棗黍栗扱」とは、棗には埃がつきやすいので常に拭って汚れを取り去り、栗は虫がつきやすいので何度も注意して見るということである。(鈴木)

【柳】

柳は柔脆にして生じ易きの木なり。楊と同類なり。縦横に顛倒すと雖も、之を植うれば皆生ず。然れども十人をして之を植えて、一人をして之を揺らしめば、則ち柳を生ずる無し。賢を立つるの道、何を以て此れと異ならんや。況や之を植うるの人寡くして、之を揺するの人衆きをや。松柏茂に醜す。桑柳苑に醜す。『詩』に曰く、「苑たる彼の桑柔」と。又曰く、「苑たる彼の柳斯」とは是なり。蓋し凡そ物は発して暢茂を成し、積みて苑結を成す。故に桑柳は條に醜す。而して其の詩之を苑と謂ふなり。苑柳に曰く、「苑たる柳有り、息ふを尚はざらんや」と。柳の苑は松柏の茂れるが若きに非ず、幾も未くして衰ふるを言ふなり。然れども人尚息ふを庶幾ふは、以て幽王の朝事すべからざること皆て苑柳にも之れ如かざるを言ふなり。『東方朔集』に曰く、「首陽を拙と為し、柳下を工と為す」と。一に柱下工と為すに作る。柱下は老子なり。柳下は展禽なり。二説皆通ず。『大戴礼』に曰く、「正月柳稊す。稊なる者は孚を発するなり」と。『本草』に曰く、「柳華、一名絮なり」と。『抱朴子』に曰く、「柳柞速やかに朽つ。燎きて以て炭と為せば、則ち億載敗れず」と。此れ養生の経、益有ること此くの如きを言ふ。故に広成子以謂へらく、我、身を修むること千二百歳。而して吾が形未だ管て衰へざるなりと。『中朝故事』に云ふ、「天街の両畔の槐木、俗に号して槐衙と為す。曲江の池畔柳多し。亦た号して柳衙と為す」と。意は其の行列を成すこと衙を排するが如きを謂ふ。今宮腰細瘦を言ひて之を柳腰と謂ふ。

〔注釈〕

- (1) 『詩経』 大雅・桑柔、第一スタンザ。
- (2) 『詩経』 小雅・小弁、第四スタンザ。
- (3) 『詩経』 小雅・菀柳、第一スタンザ。
- (4) 『東方朔集』 漢・東方朔の書か。
- (5) 『大戴礼』 夏小正。
- (6) 『重修政和經史證類備用本草』の引く『神農本草経』の柳華に「名柳絮」とある。
- (7) 『抱朴子』 内篇・至理に「柞櫨速朽者也」とある。
- (8) 『中朝故事』 五代南唐、尉遲偓の撰。

〔考察〕

『詩経』集伝には「楊は柳の揚起するものなり」とある。日本語でも、柳の枝が上に揚つているものを楊、下にさがつているものを柳とした。「縦横に顛倒す」とは枝がしだれている形状をあらわしているであろうか。枝がしだれるヤナギには、*Salix babylonica* (和名シダレヤナギ)・*Salix formia rokkaku kimura* (和名ロツカク)・*Salix formia Seiko kimura* (和名セイコヤナギ) などがある。それぞれ異なる特徴を持つているが、果たして昔から細かい区別がなされていたかは疑問である。現在、最も代表的なヤナギはシダレヤナギであろう。シダレヤナギは中国原産で、細い枝は長く下垂する。街路樹や川辺の並木として広く栽培されている。

『詩経』の菀柳は、松や柏は常緑樹のため枯れないが、柳はいずれ枯れていく。それでも柳の下で休みたいと民衆が思うのは、幽王の政治がいずれ枯れていく柳にも及ばないからだと言はれるが、陸佃は解釈して

いるようだ。

中国では、ヤナギは邪気を払う呪力をもつ植物とされていた。そのため、清明節にはヤナギの枝を用いて火を起し、枝や門や軒先にさし、また枝を髪にさしたりした。また、旅に出る人に水辺のヤナギの枝を折り、環の形に結んで贈るといふ風習もある。ヤナギの霊力によつて旅人が守られ、無事に戻る事を祈つたのである(『花と樹の大辞典』)。(鈴木)

〔楸〕

釈木に云ふ、「大にして皸なるは楸、小にして皸なるは榎」と。楸梧は早く脱す。故に楸之を秋と謂ふ。楸は美木なり。故に曰く、山千章の楸を居けば、其の人千戸侯と等しと。董子曰く、「木三時に名づけ、草一歳に命ず」と。椿は春に从ひ、楸は秋に从ひ、榎は夏に从ふが若きは、所謂木三時に名づく。芋は子に从ひ、黄は寅に从ひ、茆は卯に从ひ、茜は酉に从ひ、菱は亥に从ひ、芋は丁に从ひ、茂は戌に从ひ、芭は己に从ひ、華は辛に从ひ、葵は癸に从ふの類は、命ずるに一歳の支幹を以てす。故に草一歳に命ずると曰ふなり。『夢書』に曰く、「楡、人君と為す。楊、使者と為す。楸、諷諷と為す」と。今柳之を糸と謂ふ。楸之を線と謂ふ。按ずるに楸行列の茎幹有り。喬く聳え雲を凌ぎ、華高くして愛すべし。秋に至りて垂條線の如し。俗に之を楸線と謂ふ。『述異記』に云ふ、「越人橘柚多し。園歳ごとに橘税を出だす。之を橙橘戸と謂ふ。中山、又

楸戸有り。名を楸籍に著す者なり」と。⁽³⁾

〔校記〕

(i) 五雅本、松に作る。

〔注釈〕

(1) 『爾雅』 楸木。

(2) 未詳。

(3) 『述異記』 梁、任昉の撰。

〔考察〕

キササゲ属 (*Catalpa*) は、東アジアとアメリカ大陸に約十種類あまりが分布している。楸はキササゲ属の (*Catalpa bungei*) (和名トウキササゲ) であると考えられる。

『爾雅』には「椅、梓」とあり、郭注は「即ち楸なり」としている。『説文解字』には「梓、楸也」「楸、梓也」「椅、梓也」とあり、梓・楸・椅は同一の植物のようである。しかし、『詩経』 鄘風・定之方中には「之に樹うるは榛・栗・椅・桐・梓・漆」と、椅と梓を同時にあげているので、少なくとも椅と梓は区別されていたのではないだろうか。そこで陸佃の記述を見ると、「椅即ち是れ梓なり。梓即ち是れ楸なり」としながらも「蓋し楸の疏理にして白色なる者を梓と為す」と、楸と梓を区別している。

改めて楸の記述について見てみよう。「大にして鼓なるは楸」「喬く聳え雲を凌ぎ」といった記述から高木の類と思われる。トウキサ

サゲは高さ十五メートル。キササゲが約六メートルなので二倍以上である。トウキササゲの蒴果は線状で、それを楸線というのである。(鈴木)

〔桜桃〕

桜桃の木為る、蔭多し。其の果先に熟す。一名荊桃、一名含桃。許慎曰く、「鶯の含み食ふ所、故に含桃と謂ふ」と。⁽¹⁾ 之を鶯桃と謂ふは、則ち亦た鶯の含み食ふ所を以ての故に之を鶯桃と謂ふなり。月令に、「仲夏⁽ⁱ⁾の月、天子羞むるに含桃を以てす」とは、新しきを薦むるを言ふなり。其の類の大なる者は或は彈丸の如し。小なる者は珠璣の如し。南人の語に、其の小なる者は、之を桜珠と謂ふと。『字説』に云ふ、「桜は実を主とす。么穉柔沢なること嬰の如き者なり。栲は材を主とす。成就堅久なること考の如き者なり」⁽³⁾と。

〔校記〕

(i) 五雅本、春に作る。

〔注釈〕

(1) 現行本の『説文解字』には見えない。

(2) 『礼記』 月令。

(3) 『字説』 宋・王安石の著。すでに散逸して伝わらない。

【考察】

桜桃は、和名シロハミザクラ(学名 *Prunus pseudocerasus*) に同定される。シナミザクラの花は、三月から四月に葉と同時に葉より早く咲く。果実は一センチ以内と小さい。中国では果実を食べるために栽培されている。

月令の記述に「仲夏の月、天子羞むるに含桃を以てす」とあるから、この時期に果実が熟するのであろう。仲夏の月の記述には、「是の月や日長く至る」とある。これは夏至の事であるから、六月ぐらいだろう。ところが、シナミザクラの果実は七月に熟して黒紫色となる。気候の差であらうか。あるいは含桃はユスラウメ(学名 *Prunus tomentosa*) であるとされている。ユスラウメは六月頃に熟し果実は一から二センチ。シナミザクラと大きな差はない。「一名含桃」としていることから、明確な区別がなかったとも考えられる。(鈴木)

【柏】

柏、一名榲。雑記の所謂「暢白榲を以てす」とは是なり。柏の性は堅緻にして、脂有りて香し。故に古人、破りて暢白と為し、用ひて以て鬱を擣く。『詩』に曰く、「汎たる彼の柏舟、彼の中河に在り」と。言ふところは、柏以て舟を為るべからざるに非ず。特柏の宜しとする所に非ず。故に共姜、義を守りて引きて以て自ら況するなり。共姜義を守りて、自ら誓ふ所以此くの如ければ、則ち奪ひて

之を嫁せんと欲する者は、特天性の愛に牽かるのみ。故に曰く、

「母や天や、人を諒とせず」と。伝に云ふ、「天は父を謂ふなり」

と。蓋し毛、序する者の所謂父母奪ひて之を嫁せんと欲すを読むの誤りなり。且つ女子母に従ふのみ。故に母と称す。何ぞ必ずしも

父を言はんや。然る後に序の如し。王文公曰く、「槐黄の中、其の

華又黄なり。其の美を懐きて以て時を発する者なり」と。故に公位

するなり。松華は猶ほ槐のごときなり。而して実も亦た玄し。然れ

ども華は春を以てす。公の上に事ふる所以の道に非ず。柏の松に視

ふるは、猶ほ伯の公に視ふるがごとし。伯誦に用ふるに躬圭を執る

所の者は此れを以てなり。公直に用ふるに桓圭を執る所の者は此れ

を以てなり。榲は柏葉松身、則ち華と身皆曲なり。縦は松葉柏身、

則ち葉と身皆直なり。縦は直を以てして之に従ふ。榲は曲を以てし

て之に會す。世に云ふ、「柏の西を指すは猶ほ磁の南を指すがごと

きなり」と。

【校記】

(i) 五雅本、流に作る。

【注釈】

- (1) 『礼記』雑記。
- (2) 『詩経』邶風・柏舟、第一スタンザ。
- (3) 『毛詩』邶風・柏舟の毛伝。
- (4) 王文公は王安石のこと。
- (5) 未詳。

〔考察〕

柏は、和名コノテガシワ（学名 *Platycladus orientalis*）に同定される。中国原産で、枝が平たく手のひらを立てたように見えるので、兎手柏（コノテガシワ）という。平らな枝葉が垂直に立つことを「松葉柏身、則ち葉と身皆直なり」と言っているのであらうか。寒さにも乾燥にも強く、三月頃に花をつける。正月には幸福のお守りに枝を取るといふ風習がある（『世界有用植物事典』）。

「柏の西を指すは猶ほ磁の南を指すがごときなり」とあるが、小野蘭山も『本草綱目啓蒙』で「側柏は西に向て枝を出す」というように述べている。しかしどのような形状を指すかは不明である。また、西は五行説にあてはめると金である。五行説の金には白色が配当されるため、「柏」という字がついたという説もある。

『詩経』鄘風・柏舟は、柏の材質の堅さで身持ちが堅いことを例えているようだ。（鈴木）

〔梧〕

梧、一名櫬、即ち梧桐なり。今人其の皮青きを以て、号して青桐と曰ふ。華は浄にして妍雅なり。極めて愛すべきと為す。故に多く齋閣⁽¹⁾に近く之を種ゆ。梧は囊と鄂は皆五。其の子乳に似、其の囊鄂を綴りて生ず。多くは或は五・六、少なきは或は二・三。故に飛鳥中に巢づくるを喜む。『莊子』の所謂「空穴風来たる。桐乳巢を致す⁽²⁾」とは是なり。今亦た之を梧子と謂ふ。『詩』に曰く、「鳳皇鳴

く、彼の高岡に。梧桐生ず、彼の朝陽に⁽²⁾と。蓋し梧桐は以て才の柔令なるに譬へ、朝陽は以て徳の温厚なるに譬ふ。『莊子』に曰く、「師曠の策を枝ふるなり。恵子の梧に抛るなり⁽³⁾」と。此れ精は大いに用ふれば則ち竭き、神大いに用ふれば則ち弊るるを言ふ。故に二子疲れ或は策に枝へられて立つ。昏くして或は梧に抛りて隕するなり。

〔校記〕

(1) 叢書本、閣に作る。

〔注釈〕

- (1) 現行本の「莊子」には該当する記述はない。
- (2) 『詩経』大雅・卷阿、第九スタンザ。
- (3) 『莊子』斉物論。

〔考察〕

梧は、和名アオギリ（学名 *Firmiana simplex*）に同定される。樹皮は緑色で滑らかである。果実は袋果状になり、成熟前に五裂開する。これは「梧は囊と鄂は皆五」と一致する。種子はその縁に数個つける。材は淡色でやわらかく、中国では楽器などにも用いる（『植物の世界』）。こういった特徴や樹皮の美しさから、うるわしいことの例えとされてきたのだろうか。

梧桐一葉という言葉は、アオギリが一葉落ちること秋の到来を知ることである。中国では秋のおとずれを代表する植物とし

て詩歌に使われていたようだ。またこの故事には物事の衰える兆しが見えるという意味もある。

鳳凰がとまる木という伝承もあり、『韓詩外伝』には、「鳳凰、帝の梧桐に住む」という記載がある。(鈴木)

【桐】

これ即ち白桐なり。華さきて実らず。賈思勰曰く、「白桐は子無し」と。冬子に似たる者を結ぶは、乃ち是れ明年の華房なり。『爾雅』に曰く、「榮は桐木なり」とは即ち此れ是れなり。桐木華さきて実らず。故に曰く、榮は桐木なりと。今亦た之を華桐と謂ふ。

華は則ち其の華さきて実らざるを以てするなり。賈思勰曰く、「桐葉⁽¹⁾華さきて実らざる者は白桐と曰ふ。而して皮青き者は梧桐と曰ふ」と。今其の実を炒めて之を噉ふ。味菱莢に似たり。桐に三輩有り。青白の外、復た岡桐有り。即ち油桐なり。高岡に生ず。今亦た之を岡梧と謂ふ。蓋し梧⁽²⁾の性、便ち濕なり。岡に生ぜ

ず。故に此の桐、岡の号有り。毛詩伝に曰く、「梧桐は山岡に生ぜず。太平にして後朝陽に生ず」と。陶氏云ふ、「桐、四種有り。

梧桐は葉皮青く、梧⁽³⁾に似て子無し。梧桐は色白く、葉青桐⁽⁴⁾に似て子有り。白桐は岡桐と異なる無し。唯だ華子有るのみ。岡桐は子無し。是⁽⁵⁾れ琴瑟を作る者は皆拋るに足らず」と。按ずるに、青桐は即ち今の梧桐なり。白桐は又、岡桐と全く異なる。白桐子無し。才かに琴瑟に中る。岡桐は子大にして油有り。陶氏の

説と正に反す。『詩』に曰く、「湛湛たる露は、彼の杞棘に在り。

愷悌たる君子は、令徳ならざるは莫し」⁽⁶⁾。其の桐其の椅、その実離離たり。愷悌たる君子は、令儀ならざるは莫し」⁽⁷⁾と。杞棘は剛木なり。故に詩以て令徳に況す。椅桐は柔木なり。故に詩以て令儀に況す。『淮南子』に曰く、「梧桐は角を断ち、馬鬣は玉を截る」⁽⁸⁾と。柔弱の剛強に勝つこと此くの如きを言ふ。『論衡』に曰く、「楓桐速やかに長ず。故に其の皮肌、堅なること能はず」⁽⁹⁾と。

『老子』に曰く、「大器晚成す」⁽¹⁰⁾と。豈に信ならずや。『孟子』に曰く、「豈身を愛すこと桐梓に若かざらんや」⁽¹¹⁾と。又曰く、「其の梧

櫟を捨てて、其の楓棘を養はば、則ち賤場師と為さん」⁽¹²⁾と。梧は桐の輩なりと雖も、梧は下、桐は上。櫟は梓の輩なりと雖も、櫟は下、梓は上。故に桐梓は身を愛するの譬へなり。梧⁽¹³⁾櫟は以て

眉⁽¹⁴⁾背を況するのみ。『蔡邕月令』に云ふ、「桐始めて華さく」⁽¹⁵⁾と。桐は木の名。木の後に華さく者なり。稗の故に始と曰ふ。

『易緯』に曰く、「桐は枝濡蠹にして又空中なり。成り難く傷み易し」⁽¹⁶⁾と。氣を成すを須ちて、後に華さく。『淮南子』に曰く、「桐木雲を成す」⁽¹⁷⁾と。言ふところは、其の升氣以て雲を造すべしと云ふ。

『遁甲』に曰く、「梧桐生ぜざれば則ち九州異なる」⁽¹⁸⁾と。之に名づけて桐と曰ふは之に本づくに似たり。桐は柔木なり。而して其の心を虚にするは、能く同ずるが如き者なり。父の喪は竹を杖つき、母の喪は桐を杖つく。竹に節有るは父の道なり。桐能く同ずるは母の道なり。母は子に従ふ者なり。旧説に「梧桐以て日月の正閏を知る」⁽¹⁹⁾と。十二葉を生じ、一辺に六葉有り。下従り一葉を敷く。一葉

を一月と為す。閏有れば則ち、十三葉を生ず。葉の小さき者を視れば則ち閏の何月なるかを知る。生ぜざれば則ち九州君を異にす。

【校記】

- (i) 五雅本、華に作る。
- (ii) 五雅本、蓋梧の二字を欠く。叢書、梧を桐に作る。
- (iii) 五雅本、桐に作る。
- (iv) 五雅本、銅に作る。
- (v) 五雅本、而に作る。
- (vi) 五雅本・叢書本、岡に作る。
- (vii) 五雅本、桐に作る。
- (viii) 五雅本・叢書本、肩に作る。
- (ix) 五雅本、云に作る。

【注釈】

- (1) 『齊民要術』卷五、植梧。
- (2) 『爾雅』積木。
- (3) 『齊民要術』卷五、植梧。
- (4) 『詩経』大雅・卷阿の毛伝。
- (5) 『重修政和經史證類備用本草』の引く、『神農本草経集注』の桐葉。
- (6) 『詩経』小雅・淇露、第三スタンザ。「懜悌君子」は詩経では「顯允君子」に作る。
- (7) 『詩経』小雅・淇露、第四スタンザ。「懜悌君子」は詩経では「豈弟君子」に作る。
- (8) 『淮南子』説山訓。
- (9) 『論衡』十四卷に「楓桐之樹、生而速長、故其皮肌不能堅剛」とある。
- (10) 『老子』第四章。
- (11) 『孟子』告子上。
- (12) 『蔡邕月令』、『蔡氏月令』ともいう。正式名称は『月令章句』。蔡邕は後漢末の古典学者。

- (13) 『易緯』 易の緯書をいう。
- (14) 現行本の『淮南子』にはない。
- (15) 『藝文類聚』木部・桐。
- (16) 未詳。

【考察】

キリ属 (*Paulownia*) は中国大陸・台湾・ベトナムに六種ある。キリ属は生長が著しく速い。中でもキリ (学名 *Paulownia tomentosa*) は、上質の材とされる。前年の秋から大きな花序をつくり、五月になつて多数の紫色の花を咲かせる(『世界の植物』)。陸佃は桐の種類として、白桐・梧桐・岡桐と三種類あげており、陶弘景は青桐・梧桐・白桐・岡桐と四種類あげている。しかし両者の論じる特徴は一致しておらず、それぞれ何に同定されるかは不明である。

陸佃は『淮南子』を引いて材がやわらかいこと、『論衡』を引いて生長が速いことを述べており、いずれもキリの特徴と一致する。キリは生長が速く軽軟なわりにはもろくない。加工もしやすく仕上がりが美しい(『世界有用植物事典』)。このように多く優れた特徴をもった材であるため、「梧は下、桐は上」と昔から認識されていたのであろう。

『詩経』大雅・卷阿の毛伝には「梧桐は山岡に生ぜず。大平にして後朝陽に生ず」という言葉がある。これを受けて「生ぜざれば則ち九州君を異にす」としているようだ。つまり桐が育たないということは、君主が変わるといような異変が起こると考えられていたようである。(鈴木)

【柘】

柘、山石に宜し。柞、山阜に宜し。楮、澗谷に宜し。柳、下田に宜し。竹、高平の地に宜し。崔豹『古今註』に曰く、「杼実を椽⁽¹⁾と曰ふ。棘実を棗と曰ふ。桑実を葦と曰ふ。柘実を佳と曰ふ⁽¹⁾と。佳の言は佳なり。鳥の性の食ふ所なり。考工記に曰く、「弓人材を取るに柘を上と為す。櫛之に次ぐ。槩桑之に次ぐ。橘之に次ぐ。木瓜之に次ぐ。荆之に次ぐ。竹を下と為す。」⁽²⁾と。蓋し弓材、槩より良きは莫し。尤も柘よりも良し。故に皇矣⁽³⁾に、其の槩を先にして、其の柘を後にす。『蚕書』に曰く、「柘葉蚕を飼ふなり。其の糸、琴瑟の弦を作る」⁽⁴⁾と。清鳴響⁽ⁱⁱ⁾亮、凡糸に勝ること遠し。

【校記】

- (i) 五雅本、豫に作る。
- (ii) 五雅本、嚮に作る。

【注釈】

- (1) 『古今註』草木。
- (2) 『周礼』冬官・考工記。
- (3) 『詩経』大雅・皇矣を指す。
- (4) 未詳。

【考察】

柘は、和名ハリグワ(学名 *Cudrania tricuspidata*) に同定される。現

在知られているクワの仲間は約十種類、研究者によつては二十種類以上を認める。ハリグワは様々な用途のある植物で、根皮や樹皮は薬用になる。果実は食べることが可能で酒もできる(『植物の世界』)。

また『証類本草』の引く『本草衍義』には「柘木：葉硬、然不及桑葉」とある。ハリグワの葉はクワ (*Morus*) より硬く厚い。カイクの餌には、できるだけ薄くて柔らかい葉を与えた方が上等の絹糸を吐き出すという(『原色日本昆虫図鑑』)。「本草衍義」の記載はカイクの餌としてハリグワがクワより劣っているということだろう。(鈴木)

【椒】

椒は茱萸に似て小。赤色。内に黒子点の如きを含む。今、椒目と謂ふ。木に針刺有り。葉堅くして滑沢。『爾雅』に曰く、「椒・櫛は菜に醜す。桃・李は核に醜す」⁽¹⁾と。桃李の属は皆内核、椒櫛の属は皆外菜を言ふ。『酉陽雜俎』に曰く、「椒以て水銀を来⁽¹⁾すべし」⁽²⁾と。茱萸の気は上るを好み、椒の気は下るを好む。蓋し椒気は性上達せず。故に詩以て沃を譬ふなり。言ふところは、沃は盛強にして、能くその政を脩む。然れども其の馨香下達するのみ。『詩』に曰く、「椒柳の実、蕃衍して升到盈つ」⁽³⁾。「椒柳の実、蕃衍して菊に盈つ」⁽⁴⁾と。沃は子を支へて邑を受くるを以て、その後遂に将に盛大にならんとす。則ち猶ほ之れ椒のごときなり。その実、蕃衍して

升に盈ち、菊に盈つるに至るなり。升に盈つを先にし、菊に盈つを後にするは則ち、古へ菊は大にして升は小なり。升の容るる所、以て菊に盈つるに足らざる故なり。或は曰く、『広雅』以為へらく、両手之を菊と謂ふ。菊は一升なり。故に是の詩、先づ升と言ひ、後に菊と言ふ。相備ふるのみ。『莊子』に曰く、「韋以て椒を衷む。絺綌を踰ゆと雖も、然れども久しければ、則ち臭椒なり」と。故に天下の理、初め佳なるが如きと雖も、後に更に害と為ること有るは、察せざるべからざるなり。

【校記】

(一) 五雅本、求に作る。

【注釈】

- (一) 『爾雅』 枳木。
- (二) 『西陽雜俎』 広動植・木篇。
- (三) 『詩経』 唐風・椒柳、第一スタンザ。
- (四) 『詩経』 唐風・椒柳、第二スタンザ。
- (五) 現行本の『莊子』には見えない。

【考察】

椒は、和名サンショウ(学名 *Zanthoxylum piperitum*) に同定される。サンショウは山地に自生する落葉高木である。果実は秋に熟し、果皮がむけると中からつやのある黒色の種子があらわれる。これは人の目玉に似ていることから椒目ともいう。また実はことの外に多

く、子孫の繁栄の象徴によく用いられる。そのため、漢の時には後宮を椒房といっていた。香氣と辛みの鋭さから、邪気を避けることも考えられていたようだ。そのためか、『名医別録』では出産の予後に用いる薬とされている。

『詩経』唐風・椒柳は、上述のようなサンショウの特徴から、サンショウの実が升に満ち、さらには菊(両手)に満ちるにいたり、子孫が繁栄していくことを表しているようである。(鈴木)

【梓】

伝に曰く、「橋は父の道なり。梓は子の道なり」と。旧説に、椅即ち是れ梓なり。梓即ち是れ楸なり。蓋し楸の疏理にして白色なる者を梓と為す。梓実桐皮を椅と曰ふ。其の実は両木、大類は同じくして小別なり。今牡丹を呼びて、之を華王と謂ひ、梓を木王と為す。蓋し木は梓より良きは莫し。故に『書』は梓材を以て篇に名づく。『礼』は梓人を以て匠に名づくるなり。『書』に曰く、「若、梓材を作るに既に樸斲を勤め、惟だ其れ丹臙を塗れ」と。言ふころは、王者の造始、典則を作為し以て諸侯に授くは、則ち既に樸斲を勤むるの譬へなり。諸侯、飾を致して其の功を嗣ぎ之を終ふは、則ち惟だ其れ丹臙を塗るの譬へなり。『詩』に曰く、「之に樹うるは榛・栗・椅・桐・梓・漆」と。其の宮中に植うる所、皆能く預め礼楽の用に備ふるを言ふなり。語に曰く、「一年の計は穀を種うるに如くは莫し。十年の計は木を種うるに如くは莫し」と。故に文

公、初めて宮室を作るの時に於いて、早く計ること此くの如し。又曰く、「維れ桑と梓と、必ず恭敬す」と。桑梓は父の植う所、尚或は之を敬ふを言ふなり。『礼』に曰く、「君の几杖を見れば則ち起つ」とは其れ是に類するか。『戸子』に曰く、「荆に長松・文梓有り」と。

〔校記〕

(1) 五雅木、類の字を欠く。

〔注釈〕

- (1) 未詳。
- (2) 『書経』 梓材を指す。
- (3) 『礼記』 梓人を指す。
- (4) 『書経』 梓材。
- (5) 『詩経』 鄘風・定之方中、第一スタンザ。
- (6) 『管子』 榷修。
- (7) 『詩経』 小雅・小弁、第三スタンザ。
- (8) 『漢書』 賈誼伝。
- (9) 『戸子』 戦国・戸俊の著。すでに散逸して伝わらない。

〔考察〕

梓は、和名キササゲ(学名 *Catalpa ovata*) に同定される。キササゲは中国原産で薬用や観賞用に栽培される。若芽は食用にもなる。根皮や樹皮は、解熱・駆虫などにも用いられている。材は軽いので器具などに用いられる(『世界有用植物事典』)。『詩経』の「之に樹うるは榛・栗・椅・桐・梓・漆」とは、楽器を作るために植えるとい

うことである。『齊民要術』にも「十年後、一樹千錢、柴在外。車板、盤合、楽器、所在任用」とあるから、古くは楽器にも用いられていたのかもしれない。

「維れ桑と梓と、必ず恭敬す」とは、桑は蚕の餌になるもの、梓は蚕具を作るものである。その木をは父が植えたのであり、木を見て父の恩沢に浴することをおもい恭敬するのである。(鈴木)

【榛】

榛は梓に似、実は小栗の如し。栗の属なり。先王以て女の摯と爲す。『詩』に、「營營たる青蠅、樊に止まる」「棘に止まる」「榛に止まる」と曰ふ者は、圃に樊有り、園に棘有り、山に榛有りを言ふ。遠ざからんと欲して、止まることの弥いよ遠きを明らかにするなり。又、「鳴鳩桑に有り、其の子梅に有り」「其の子棘に有り」「其の子榛に有り」と曰ふ者は、蓋し先づ実る者は梅、後に実る者は棘、先づ実る者は棘、後に実る者は榛、故に其の序此くの如し。亦た其の榛は棘より卑小、棘は梅より卑小なり。『詩』以て此を刺る。故に況する毎に愈いよ下るなり。賦に云ふ、「榛栗罇瓮せり」と。江南に小栗有り。之を茅栗と謂ふ。此れ茅を讀んで茅と爲すの誤りなり。『莊子』に曰く、「狙公、芋を賦ふるに、朝には三にして暮れには四にせん。衆狙皆怒る」と。芋は小栗なり。

【校記】

- (i) 五雅本、圃に作る。
- (ii) 五雅本、茅に作る。

【注釈】

- (1) 『詩経』 小雅・青蠅、第一スタンザ。
- (2) 『詩経』 小雅・青蠅、第二スタンザ。
- (3) 『詩経』 小雅・青蠅、第三スタンザ。
- (4) 『詩経』 曹風・鳴鳩、第二スタンザ。
- (5) 『詩経』 曹風・鳴鳩、第三スタンザ。
- (6) 『詩経』 曹風・鳴鳩、第四スタンザ。
- (7) 未詳。
- (8) 『莊子』 齊物論。

【考察】

榛は、和名ハシバミ(学名 *Corylus heterophylla*) に同定される。ハシバミは陽地に生える落葉低木で、三月ごろ新芽に先立って開花する。果実は球形の硬果で食用となる。

「先づ実る者は梅、後に実る者は棘、先づ実る者は棘、後に実る者は榛」とあるが、梅(ウメ)は六月ごろ、棘(ナツメ)は七月ごろ、榛(ハシバミ)は九月頃に実る。また実の大きさも述べている。梅は二から三センチ、棘は一・五から二・五センチ、榛は一・五センチほどである。わずかな差ながら陸佃の述べる通り、ハシバミの実が一番小さい。

『詩経』 曹風・鳴鳩はそれぞれの実りの順番で、鳴鳩の小鳥達が

次第に飛び立っていく様子を表している。(鈴木)

【榦】

木の臥死するを翳と為し、立死するは榦なり。『荀子』に曰く、「周公の状⁽¹⁾は身、菑を断つが如し。皇陶の状は色、瓜を削るが如し」と。これを以て相を非とするは、蓋し以て之を非とするに足らず。『詩』に曰く、「之を作し之を屏するは、其の菑、其の翳」⁽²⁾。「之を修め之を平ぐるは、其の灌、其の榦」⁽³⁾。「之を啓⁽⁴⁾き之を辟くは、其の櫟、其の榦」⁽⁴⁾。「之を攘ひ之を剔るは、其の槩、其の柘」⁽⁵⁾。言ふところは周公の新民、林木を削除し、以て田を治め室を作る。其の始め、之を作し之を屏する者は榦翳のみ。既に又就く者は、衆民居る所無ければ、則ち其れ之を修し之を平ぐるや、灌榦に及ぶ。其れ之を啓⁽ⁱⁱ⁾き之を辟くや、櫟榦に及ぶ。其の尤も衆きに至るや以て之に処る無ければ、則ち之を攘ひ之を剔り、槩柘に至る。槩柘は材の美なる者、人の恃むに蚕を以てする所なり。蓋し道を論ずれば、則ち木は不材を以て生き、政を議すれば、則ち木は不材を以て死す。故に『莊子』に言ふ、「散樗は不材を以て其の天年を終ふ」⁽⁶⁾。而して是の詩も又、材木を削除するは榦翳に始まる。已むを得ずして之を去る。然る後槩柘に及ぶ。此れ古の人、才と不才の間に処る所以は。猶ほ之に似て非なりと曰ふがごときなり。

〔校記〕

- (i) 五雅木、杜に作る。
- (ii) 五雅木、辟に作る。

〔注釈〕

- (1) 『荀子』非相。
- (2) 『詩経』大雅・皇矣、第七スタンザ
- (3) 『詩経』大雅・皇矣、第八スタンザ
- (4) 『詩経』大雅・皇矣、第九スタンザ
- (5) 『詩経』大雅・皇矣、第十スタンザ
- (6) 『莊子』山木。

〔考察〕

楯は「木十箇(生長を止める)」で、立ち枯れの木のことである。そのため土地を開く時は、まず役に立たない楯・翳から切り倒し始める。『詩経』大雅・皇矣はその様子を表している。この詩を見ると灌・桮、榲・榘、檠・柘と重要視されていた木がわかる。

上述したように、土地を開く時は役に立たない楯・翳から切り倒されるが、役に立たないからこそ切り倒されない場合もある。『莊子』の「散樗は不材を以て其の天年を終ふ」とは、役に立たないからこそ自然の天命を終えることができるという意味である。(鈴木)

【楡】

楡木に云ふ、「楡は羅」⁽¹⁾と。楡、一名羅なり。其の文、細密なるこ

と羅の如し。故に羅と曰ふなり。又白き者有り。赤羅は文棘。白羅は文緩。皆、所謂文木なりと雖も、然り而して赤羅を上と為す。故に穆公之を植う。秦詩初め晨風と曰ひ⁽²⁾、卒りに樹楡と曰ふ者は、人君の賢を用ふる所以の道は、能く之を致すに始まり能く之を立つるに終はるを言ふ。楡は之を緩と謂ひ、杉は之を紗と謂ひ、楡は之を羅と謂ふ。羅も亦た華有る者は、俗に之を羅錦と謂ふ。羅錦は猶ほ杉錦棟綾を言ふがごときなり。羅錦は明、杉錦は暗。今外域⁽¹⁾、棟綾の器有り。其の文は綾綺の状の如し。又、杉錦よりも下る。『爾雅』に曰く、「楨は赤棟、白き者は棟なり」と⁽³⁾。

〔校記〕

- (i) 叢書本・五雅木、は外域を虜人に作る。

〔注釈〕

- (1) 『爾雅』楡木。
- (2) 晨風は『詩経』秦風の篇名。
- (3) 『爾雅』楡木。

〔考察〕

楡は『詩経』集伝には「赤羅なり。実は梨に似て小、酢くして食うべし」とあり、郭璞は「赤羅は今の楊楡なり。実は梨に似て小さく味は酢し」としている。

『詩草木今釈』『詩経草木匯考』では、楡を和名マメナシ(学名 *Pyrus Calleryana*)としている。マメナシは、栽培されているナシの木

に比べればはるかに果実が小さい。果肉も石細胞だらけで、堅く酸っぱくえぐみがある。(鈴木)

【桂】

蘇秦曰く、「楚の国、食は玉より貴し。薪は桂より貴し。謁者は鬼を見難し。王は帝を見難し」と。(1) 蓋し桂は葉の長なり。凡そ木の葉は皆一脊。惟だ桂のみ三脊。桂の輩は三。一に曰く菌桂。葉は柿葉に似て尖滑鮮浄なり。蜀都賦の所謂、「菌桂崖に臨む」とは、即ち此の桂なり。二に曰く牡桂。葉枇杷に似て大。『爾雅』の所謂、「椈は木桂」(2)とは即ち此の桂なり。菌桂は骨無し。正円なること竹の如し。故に此れ木桂と云ふなり。三に曰く桂。旧に云ふ、葉は柏葉の如き者とは、即ち此の桂なり。皆南海の山谷間に生ず。冬夏常に青し。故に桂林、桂嶺皆桂を以て名と為すなり。『本草』に言ふ、「桂は百薬を宣導し、畏るる所無し」と。(4) 亦た云ふ、(ii)「菌桂は諸薬の先聘通使と為す」と。(5) 故に『説文』に以て百薬の長と為すなり。『莊子』に曰く、「桂は食ふべし。故に之を伐る。漆は用ふべし。故に之を割く」と。(6) 言ふところは、此れ皆其の能を以て其の生を苦しむ者なり。桂は猶ほ圭のごときなり。久しく服せば神に通ず。若し服して以て祀れば、諸薬を宣道し、之が先聘と為る。若し執りて以て使へば、又之を椈と謂ひ、能く他木を侵して之を斃す。『談苑記』に、「江南後主、清暑を患ふ。閣前に草生ず。徐錯、桂屑を以て磚縫の中に布かしむれば宿草盡く死

す」と。(7) 『呂氏春秋』に云ふ、「桂枝の下、雜木無し」と。(8) 蓋し、桂の味辛く整すが故なり。然らば桂の草木を殺すは自ら是れ其の性なり。辛整と為さざるなり。『雷公炮炙論』に云ふ、「桂を以て丁を為り、以て木中に釘すれば、其の木即ち死す」と。(9) 一丁は至て微なり。未だ必ずしも大木を斃す能はず。自ら其の性相制するのみ。『越絶書』に曰く、「人固より同じからず。慧種聖を生じ、癡種狂を生ず。桂実桂を生じ、桐実桐を生ず」と。(10) 鯨の禹を生むを以て之を考するに殆ど然らず。異書に云ふ、「月中に桂有り。下に一人有り。常に之を斫る。木瘡随ひて合す」と。(11)

【校記】

- (i) 五雅本、背に作る。
- (ii) 叢書本、曰に作る。
- (iii) 叢書、謂に作る。
- (iv) 五雅本、陰に作る。

【注釈】

- (1) 『戦国策』卷一六、楚策。
- (2) 『文選』蜀都賦の句。
- (3) 『爾雅』積木。
- (4) 『重修政和經史證類備用本草』の引く『神農本草經』の桂。
- (5) 『重修政和經史証類備用本草』の引く『名醫別録』の菌桂。
- (6) 『莊子』人間世。
- (7) 『談苑記』宋・黃鑑の撰。
- (8) 現行本の『呂氏春秋』には見えない。

(9) 未詳。

(10) 『越絶書』 漢・袁康の撰。

(11) 未詳。

【考察】

陸佃は桂には三種類あるとして、菌桂・牡桂・桂をあげている。しかし牡桂の異名を椶や木桂としておきながらも、菌桂の異名に木桂をあげており、三種類に明確な区別があつたかは不明である。また『説文解字』には「椶、桂なり」という記載もあり、『爾雅』の「椶は木桂」という記述とあわせて考えると、椶・桂・木桂は同じものであつたとも考えられる。

陸佃の述べる菌桂の特徴は『山海経』の郭璞注には「衡山有菌桂、桂員似竹」とほぼ合致する。真柳誠は「中国一世紀以前の桂類薬物と薬名」(『薬史学雑誌』三〇巻二号、一九九五年)で、『新修本草』の「牡桂葉、長尺許」から、牡桂は主に *Cinnamomum cassia* (和名カシア) で一部には *Cinnamomum obtusifolium* もあつたであろうと判断している。更に『新修図経』注で牡桂の葉を「長於菌桂葉一二倍」としていることに注目している。当記述から葉の長さが *Cassia* や *Cobusifolium* の二分の一から三分の一である *Cinnamomum burmanni* を菌桂に同定している。

Cassia は葉の長さ十二から十五センチ、つやのある緑色で、三本の葉脈が目立つ。中国南部やインドシナ半島に自生する。セイロンニッケイに比べて辛味があつて、甘みがない。

Cumamini の葉は約五から十センチ。前述の通り、*Cassia* の二

分の一から三分の一である。(鈴木)

【粉】

粉は白榆。先ず葉を敷き、後に夾を著く。榆の性は地を扇ぐ。扇ぐ所は各、木と等し。故に其の陰の下、五穀植えずして古の人就きて以て息ふ。東門之粉の一章に曰く、「東門の粉、宛邱⁽¹⁾の栩⁽²⁾、子仲の子、其の下に婆娑たり」と。言ふところは、風化の行はるる所、大夫氏の子、道に舞ふなり。二章に曰く、「穀旦手に差ぶ、南方の原、其の麻を績まず、市に婆娑たり」と。言ふところは、風化の行はるる所、大夫氏の女、市に舞ふなり。男子道に舞ふは、尚宜しき所に非ず。女子市に舞ふは、尤も宜しき所に非ず。且つ東門は人の出入する所、宛丘の道は人の往来する所、国の交会なり。是に於いて粉栩の陰有り。則ち人の趨きて聚まる所なり。『管子』に曰く、「桓公の時、而⁽³⁾して衢の民、桑麻種えず。繭縷治めず。衣弊るること多く、屨しば穿つこと多し。管仲、途旁の枝に沐せんことを請ふ」と。尺寸の陰無から使むるは、是れが為の故なり。内則に曰く、「董苴、粉、榆、兔、薨、滌灑、以て之を滑らかにす⁽⁴⁾」と。兔は新生なる者、薨は其れ乾なり。董苴、粉、榆の初生は其の葉、蓋し兔目に象る。故に之を兔と謂ふなり。『淮南子』に曰く、「槐の生ずるや、五日にして兔目、十日にして鼠耳」と。『字説』に曰く、「榆の藩は滑なり。故に之を俞莖と謂ふ」と。俞にして刺有り。至と為す所以なり。粉は俞のみ。安らかにして長ずべきなり。

兪を以て合と為し、乃ち分に卒はる。夫れ很なること粉の如し、兪なること粉の如し。皆分の道なり。

〔校記〕

- (i) 五雅本・叢書本、丘に作る。
- (ii) 叢書本、五に作る。

〔注釈〕

- (1) 『詩経』陳風・東門之粉、第一スタンザ。
- (2) 『詩経』陳風・東門之粉、第二スタンザ。
- (3) 『管子』立政。
- (4) 『礼記』内則。
- (5) 現行本の『淮南子』には見えない。
- (6) 『字説』宋・王安石の著。すでに散逸して伝わらない。

〔考察〕

ニレ属 (*Ulmus*) は、北半球温帯および熱帯アジアの山地帯に約二十種類が分布している。材は各種器具材とし重用される。ニレ属の果実は周縁に翼のある扁平な翼果で、莢を着けているように見える。これを「後に夾を著く」としているのではないだろうか。

『詩経』陳風・東門之粉に詠われているように、粉は道端にあつて日陰ができるので、人の集まる所とされている。ニレ属は現在、街路樹として多く植栽されているが、昔から用いられていたことがわかる。

『詩草木今釈』『詩経草木匯考』は粉を *Ulmus pumila* (和名ノニレ) に同定している。ノニレはシベリアから中国に分布し、觀賞用だけでなく、材は建築、器具、農具などに用いられる。若芽や果実は食用にされ、家畜の飼料にもなる。根からは粘液質がとれ、製紙の粘料にされた(『世界有用植物事典』)。その粘液質を瀝(汁)として「瀝は滑なり」と述べているのであろうか。(鈴木)

【榎】

木⁽¹⁾、高大なること白楊に似たり。枝多くして曲がる。飛鳥、其の上に巣づくるを喜ぶ。賦に曰く、「根句に來り巢くふ」⁽²⁾とは是れなり。子は房に依りて生じ、枝端に著し、大なること指の如し。長さは数寸。状は珊瑚の如し。之を噉へば甘美なること飴の如し。今俗に之を枿榎と謂ふ。『古今註』に曰く、「二名樹蜜、一名木錫」⁽³⁾と。実の形、巻曲す。核、実の外に在り。其の木を以て屋と為す。酒に近づくれば、能く酒の味を薄からしむ。曲礼に曰く、「婦人の摯は、榎、榛、脯、脩、棗、栗」⁽⁴⁾と。榎は巻曲に取る。榛は至を言ふ。棗は早を言ふ。栗は恂栗を言ふ。故に以て虔を告ぐと曰ふなり。

〔校記〕

- (i) 叢書本、榎の一字有り。

〔注釈〕

- (1) 『文選』宋玉の風賦。
- (2) 『古今註』草木。
- (3) 『礼記』曲礼。

〔考察〕

榎は、和名ケンポナシ（学名 *Havenia volckii*）に同定される。ケンポナシは落葉高木で、高さ二十五メートルに及ぶものもある。実は花序の軸が果実の熟すにつれて太く肉質になったもので、特殊な形をしている。手棒梨とも言われるように、手の指のようにも見える。

巻曲には二つの意味がある。一つは曲がりくねるといふ意味で、もう一つはへりくだるといふ意味である。指のような形をした実は「状は珊瑚の如し」とも表されているようにでこぼこしており、「巻曲」とも言えるだろう。そのため「虔を告ぐ」として、婦人の贈り物に重宝されたのではないだろうか。

ケンポナシの果実には利尿作用があるため、現在も酒の酔いをさますのに効果があるとして利用される。そのような効果から「酒に近づければ、能く酒の味を薄からしむ」と考えられるようになったのかもしれない。日本にもケンポナシを食べると酒に酔わない、ケンポナシの材で酒樽を作ると酒がくさるなどという話がある。これらはケンポナシの甘味の強調のために始まったという説もある（『世界の植物』）。